

## 8. 小児のけいれんに関する研究, 治療に関する研究

研究協力者 渡辺 一功  
共同研究者 原 紀美子 宮崎 修次  
岩瀬 勝彦 根来 民子  
松本 昭子 杉浦ミドリ  
(愛知県コロニー中央病院  
小児神経内科, 名古屋大  
学医学部小児科)

### I 點頭てんかんの長期予後

#### <方法>

昭和38年から49年までに当科を受診し, 點頭てんかんと診断された患者のうちで, 昭和54年までに学齢期以上に達した症例は, 総数で210例であった。54年3月現在当科外来を通院のものは91症例で, 脱落例は84例(うち21例は学齢期以上まで外来通院後脱落), 死亡例は35例であった。脱落例に対してはアンケート調査を行い, 44例から解答を得た。従って今回我々の研究の対象となるのは, 予後の明らかな170例である。

死亡例を除く135例の調査時年齢は, 6才から21才で, 男女比は72:63であった。経過観察期間は, 5年から18年であった。死亡例35例の男女比は23:12でその平均死亡時年齢は, 男4才8カ月, 女6才5カ月であった。これらの症例について現在の状態を, ①発作の有無, ②知能障害, ③身体障害, ④就学状況の4点について調査し, それぞれに影響を与える諸因子について検討した。

#### <結果>

- ① 現在けいれん発作のあるものは, 72例(53.3%)であった。
- ② 知能障害では①知能正常21例(15.6%), ②軽度障害13例(9.6%), ③中等度障害39例(28.9%), ④重度障害62例(45.9%)であった。
- ③ 身体障害では①身体障害なし59例(43.7%), ②軽度障害24例(17.8%), ③中等度障害33例(24.4%), ④重度障害19例(14.1%)であった。
- ④ 就学状況では①普通学級21例(15.6%), ②特殊学級16例(11.8%), ③養護学校29例(21.5%), ④施設入園又は通園19例(14.1%), ⑤就学していない50例(37.0%)であった。
- ⑤ 現在の発作に対する予後不良因子としては, 3カ月以前の早期初発, 発症以前のけいれん発作, 笑い発作, 他の発作型への変化があげられ, 分娩障害, 新生児期異常, 発症以前の発達遅れ, 発症からACTH治療までの期間, PEG異常には予後は関係しなかった。
- ⑥ 身体的予後不良因子としては, 原因が, 出生前および周生期にあること, 早期初発, 分娩障害, 新生児期異常, 発症前の発達の遅れ, 笑い発作, 他の発作型への変容, PEGの異常があげられ, 発症以前のけいれん, 初発からACTH治療までの期間には関係がなかった。
- ⑦ 知能的予後不良因子としては, 原因が出生前であること, 早期初発, 発症前の発達の遅れ, 等

い発作、他の発作型への変化、PEGの異常があげられ、新生児期異常、分娩障害、点頭てんかん発症前のけいれん、初発からACTH治療までの期間には関係がなかった。

## II LENNOX症候群におけるACTH-Zの効果

1才から11才までのLENNOX症候群25例にACTH療法を試み、6ヶ月までの短期効果について、臨床的、脳波学的に検討した。

25例中、8例(32%)で発作消失(著効)、4例(16%)で3分の2以上発作減少(有効)、11例(44%)で無効であった。

発作型別では、著効+有効例は tonic seizureで3/13, tonic spasmsで1/3, myoclonic seizureで0/3, astatic seizureで2/6であり、これら発作型による差はみられなかった。minor epileptic statusでは6例中5例で著効であった。

脳波に対する効果では、ACTH療法直後に発作波が完全に消失したものは1例のみであった。約半数で発作波が著明に減少していた。minor epileptic statusでは、全例に発作波の著明減少がみられたが、それ以外では発作型による効果の差はみられなかった。

臨床的改善と脳波改善の相関をみると、臨床発作に著効のあったものは、脳波も改善しているものが多かった。発作に無効であったものは、脳波も改善していないものが多かった。

LENNOX症候群の発症年齢、ACTH療法施行時年齢、発症から治療までの期間と治療効果との間には、特に相関関係はみられなかった。

知能障害と臨床効果の関係では、重度精薄のものでは2/15に著効であったにすぎないが、軽度知能障害ないし正常のものでは6/9に著効であった。

発症前発達が正常のものでは、3/7に著効であったのに対して、異常のものでは、4/14に著効であった。

原因別に著効例をみると、不明のものでは3/7、不明だが prenatal に原因のあると思われたもの(microcephalusなど)では4/13、結節性硬化症で0/3であった。

発作回数とACTHの効果では、statusを含めて1日50回以上のもので最も効果がよかった。

## 9. West症候群のACTH療法における脳波とCTの経時的変化の検討

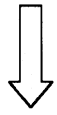
研究協力者 北 博厚

共同研究者 中野 省三

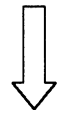
(静岡県立こども病院小児神経科)

片岡 健吉

目的：点頭てんかんの治療においてACTHの連続注射は第1撰択とされる所であるが、本剤の作用機序については未だ不明の点が多い。一方、点頭てんかんのCTは高度の脳萎縮像を主体とした様々の異常がみられることは先に報告したが、最近、ネフローゼ症候群などの内科的疾患においてsteroid大量療法を行った際にCT上脳容積の減少(所謂脳萎縮像)がみられることが注目されている。点頭



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



<方法>

昭和 38 年から 49 年までに当科を受診し,点頭てんかんと診断された患者のうちで,昭和 54 年までに学齢期以上に達した症例は,総数で 210 例であった。54 年 3 月現在当科外来を通院のものは 91 症例で,脱落例は 84 例(うち 21 例は学齢期以上まで外来通院後脱落),死亡例は 35 例であった。脱落例に対してはアンケート調査を行い,44 例から解答を得た。従って今回我々の研究の対象となるのは,予後の明らかな 170 例である。